こどもの居場所づくり支援モデル事業

西南図書館「こもれび・ひろば」

～リアル体験を通じた子どもの学びと育ちを支える居場所づくり～

最終報告書

2025 年 7 月 22 日～2026 年 3 月 31 日

NPO 法人 MerryTime

目次

1. 事業の背景と課題 p3

2. 事業の理念と目的 p3

3. 事業の柱：三つのリアル体験 p3

4. 事業の実施内容と実績 p4

5. 子どもの変化・成長の分析 p6

6. 運営における試行錯誤と工夫 p7

7. 分析・考察（モデル事業としての意義） p8

8. 今後の展望と課題 p8

9. スタッフの声 p9

10. 軽食活動一覧 p10

11. 参考資料 p11

1. 事業の背景と課題

現代の子どもたちはデジタル環境に囲まれ、学習や人間関係において多くのストレスを抱えている。塾や習い事に追われる日常の中で、「何らかの目的を達成し成果を挙げることのために行動する」ことが当たり前となっている。しかし一方で、「実際に体験する（五感を使う）」「身体を動かす」「誰かとリアルに関わる」「出来事そのものを楽しむ」といった根源的な学びの時間は十分とは言えない。

忙しい日々を送る中で自己肯定感を持てない子どもが増えている。ストレスを抱えていることに気づけていないまま成長していく彼らにとって、ほっと安心できる場所が必要だと感じる。

図書館という社会資源は“本離れ”が進む中で、学校や家庭に続く第三の空間として、子どもが安心して過ごせる「居場所」を創っていくことが大きな役割の一つとなってきているのではないか。

2. 事業の理念と目的

MerryTime では、設立以来「遊び」「学び」「楽しい」をキーワードに、子どももスタッフもともに考え成長する活動を続けてきた。15 年ほど前からは、急速に広がるバーチャルの世界に不安を感じ、子どもたちにとって、リアルな触れ合いの場がこんな時代だからこそ必要だと確信を持つに至り、小さなリアル（体験や直接五感を刺激する活動など）に着目してきた。

「みんなで遊ぶ」「誰かとリアルに関わる」「相手を思いやる」などの実体験は、自己肯定感につながると考える。

そこで私たちは、学校以外の場（図書館）で子どもたちが多様な経験を楽しめる空間を用意したいと考えた。三つのリアル体験の柱に基づき、子どもたちが安心して過ごせる場を確保し、スタッフが子どもたちと試行錯誤のプロセスを共有し、共に成長する。

本事業においては、図書館という場を活用し、地域の小・中学生の平日放課後の居場所を運営する中で、子どもたちの抱える課題や効果的な支援方策を検証することを目的とする。

3. 事業の柱：三つのリアル体験

○ リアルな学び体験

単に正解を出すことが目的ではなく、子どもと対話しながらその子に合わせたサポートをする。

○ リアルなコミュニケーション体験

子どもたちが、異年齢世代や地域住民（ゲスト）との関わり、アナログな遊びを通じて社会的スキル（ルール遵守や交渉）を習得する。

○ リアルな生活体験（軽食体験）

料理教室や子ども食堂とは異なり、調理活動を通じ、五感で感じる実体験と、皆と一緒に食べる喜びを共有する。これらの活動を契機として「食」や「健康」に関心を持ち、生活のスキル（生きる力）をつける。

4. 事業の実施内容と実績

- **実施期間**：2025 年 7 月 22 日～2026 年 3 月 31 日（基本　火・水・金曜日）
- **総開室回数**：91 回
- **最終登録者数**：61名（小学1年生～中学 3 年生まで幅広い層が利用）

学年	人数
小1	10名
小2	14名
小3	15名
小4	7名
小 5	5名
小6	3名
中2	4名
中3	3名
合計	**61名**

- **延べ参加人数**：756名（2025 年 7 月～2026 年 3 月まで）
- **スタッフ体制**：現場リーダーを中心にメインスタッフ 3 名を配置。この 4 名がミーティングを重ね、居場所の運営や企画について検討をしながら進めていった。それ以外に図書館の近所のボランティアスタッフの協力も得られた。参加人数が多いときはこれらのスタッフ以外にも希望を募り人員を配置した。

三つの柱に基づいた活動実績

曜日別の特徴：金曜日の軽食作りが特に人気で、平均 10～20 名前後が参加。
火・水曜日は、少人数で落ち着いた学習や対話の時間となった。

- **リアルな学び体験（学習支援）**

  来室後、自主的に宿題や自習に取り組む習慣が定着し、中学生が小学生に勉強を教える、スタッフと進路について対話するなど、保護者や先生以外に話を聞いてもらえる関係性ができた。

- **リアルなコミュニケーション体験（アナログ遊び・運動）**

  ボードゲーム（カタン、マンカラ等）、トランプ、将棋を通じてルール遵守や交渉スキルを育んだり、卓球、キャッチボール、牛乳パック積み、紙飛行機大会などを実施することによりストレスを発散した（特に「牛乳パック積み」はストレス発散に大きく寄与）。

- **リアルな生活体験（軽食作り）**

  西南図書館読書室の調理設備を活用し、毎週金曜日、パスタ、おにぎらず、クレープ、豚汁、七草がゆ、巻き寿司、サンドイッチ、インドの料理など多彩なメニューで軽食調理体験を重ねた。当初は大人主導だったが、回を重ねる中で班ごとの役割分担制へ移行し、最終的には子どもたちが主体的に準備から片付けまで行うスタイルを確立した。

この三つの柱の体験を通し、スタッフ側が準備や段取りを決めるのではなく、子どもたちの様子を見ながら任せるようにした。調理体験では、洗い物を丁寧にする子が出てくる、ゆずジャムづくりでは、大きなゆずの種取り作業を根気強く、面白がって取り組む姿も見られた。包丁の使い方にも慣れてきて、硬いカボチャは中学生が切るとか自ら玉ねぎのみじん切りに挑戦する小学１年生など、全員同じ体験ではないが各自の興味あることにチャレンジする姿が見られた。

会場一時移転期間の記録（於：西南生涯学習センター）

2025 年 10 月 14 日から約１か月間、図書館の施設改修等に伴い西南生涯学習センターの部屋を借りての活動を行った。

- 充実した調理設備が整った調理室を借りて、班別調理が可能となり、全工程を各自が体験できた。この体験によって、西南図書館に戻ってからも、班別調理を採用した。
- 学校から近かったため友人同士の「体験参加」が急増し、地域での認知度が高まった。

特別イベント・地域連携

- 防災アドベンチャー（暗闇体験、避難所体験、ポリ袋クッキング） R7.8. 8

  防災士　益田紗紀子さんを迎え、「こもれび・ひろば」のオープニングイベントとして、西南図書館を知ってもらうために親子で参加のイベントを実施。箕面市役所の協力も得て避難所がどんなところなのかの説明も受ける。さらに真っ暗にした会議室で足元が見えない中を障害物をよけながら歩き、災害停電時の疑似体験をした。

- ボードゲームマスターの養成　R8.3.1

  2 月末に 3 月の本番に向けて練習をしたうえで、一般に向けて開催されるボードゲームで遊ぼうというイベント当日に子どもたちが、ゲームのやり方を参加者に教えたり、ジャッジをしたりする役割を担う。2 年前から西南図書館で実施しているイベントであるが、一定の条件をクリアできれば、ボードゲームマスターに認定してもらえる制度。こもれび・ひろばの子どもたちで、初級または中級を所持している子どもも数名いたので、イベント当日には参加して、ひとつ上の級を目標にして参加することになった。

- プロによる木漏れ日コンサート。（こもれび・ひろばの子どもたち（有志）が友情出演） R8.3.8

  ハープ奏者：上原奈未さん、ボーカル：イマニシユカさん　）

  お二人の演奏に合わせて子どもたちが「朧月夜」を一緒に歌った。最初小さな声しか出なかった子どもたちが、難しい歌詞で初見だったにもかかわらず、本番では素晴らしい歌声を聞かせてくれた。聴衆からの大きな拍手を受けて、良い経験になったようだ。

- 国際交流（インド人留学生との料理・文化交流、送別会）R7.9.5、R7.12.26

  研究生として留学中に図書館利用されていたチャンダニさん、子どもが大好きということで夏休みの子どもたちとインドの料理を作って交流。年末には、インドに帰国する直前の彼女に、こもれび・ひろばで送別会を開催。日本の雑煮や、おせちの一部を子どもが作って交流した。

- ポップコーン映画会「ざんねんな生き物」

  ポップコーンを食べながら映画を見たいという願いが、図書館との協議により実現することができた。当日、いすではなく、ゴザを敷いてみたところ、子どもたちの大歓声。寝転がって友達とじゃれあったりして、いつもと違った空間が出現した。今の彼らにとってぴったりのまったりできる空間だった。

- 子ども屋台村（子ども 14 名、大人約 10 名） R8.2.20

  普段は子どもたちだけで活動する居場所であるが、年度末を迎えて、子どもたちが作った食べ物を保護者に食べてもらおうという企画を実施した。

  おにぎりやホットドッグなどを事前に準備し、保護者に入場してもらい屋台に見立てたテーブルで渡していく。楽しいひと時を過ごせた。

  スタッフが実際に保護者の皆様にインタビューして、子ども村に関する感想を聞いた。

  特に軽食活動には前向きな意見が聞かれた。

- 地域とのつながり

  地域に在住のボランティアスタッフの協力により、地元の人気ベーカリー「フェルディナンド」からのパンの耳やロールパン、アップルパイの切れ端等の提供を受けて軽食活動を実施。また当該スタッフは参加者親子に知り合いも多く、気軽に声をかけてくれることで安心感を与えてくれている。図書館と連携した「しおり作り」と図書館利用者への配布などを通じて、ひろばの存在を知ってもらい、活動に理解を得られた。

5. 子どもの変化・成長の分析

現代の子どもたちが抱える「息苦しさ」

- ほぼ全員が塾や習い事を複数抱え、「習い事が忙しくて遊べない」「週に 1 回ぐらいしかほっとできる日がない」と感じている。
- 暇があればスマホなどで隙間時間を埋めている様子。
- いい成績や勝ちを求められ続け、発散できないモヤモヤを抱えているようにみえる。
- 自分が発散できていないことを子どもは感じていないようだ。

成長プロセス

（1）発散によるエネルギーの解放

牛乳パックを大量に積んでは壊す遊びでストレスを発散し、情緒が安定。大人も参加した。

（例） A 君（小 2）は牛乳パック積みで没入し、遊ぶようになったことで、保護者から「家庭での困った行動が減少して落ち着いてきた」と報告があった。

子どもも大人も、たまったエネルギー（ストレス）は発散しなければならないことを実感。

（2）プロセスへの没入

紙飛行機大会や調理体験で「結果」よりも「過程」を楽しむ姿勢が育つ

（例） S ちゃん（小 2）は紙飛行機の折り方を探究し続ける

H 君（小 6）は卓球や迷路作りで他者との対話や工夫を楽しむ。紙飛行機大会で滞空時間を延ばすために図書館の本を借りて、自宅で研究してきて挑戦した。

（3）関係性の成熟

評価や役割から離れ、仲間としての関係性が深まる

中学生はけん玉を教える、勉強しない日を作るなど、自分のペースで過ごすようになった。

受験生の S 君は、過去問を持ち込み入試に備える勉強をマイペースで行っていた。

小学生が苦手だと言っていた K 君、紆余曲折を経て、小学生と一緒に遊んだり調理したりの活動も見られるようになった。

6. 運営における試行錯誤と工夫

- **安全管理の徹底**
  - 見守り体制の強化、緊急連絡先の事前把握、参加者が多くみられる場合は、スタッフの人員増加
  - 事故発生時にはスタッフ間で課題を共有し、スタッフの動きを見直し、体制を強化
- **調理活動のアップデート**

  どの様に工夫しても参加者が増えると、一人当たりの作業量や体験時間が減少するのは否めない。
  - 「プロセスを楽しむ」要素を強め、子どもたちが自分のペースで調理活動に向き合えるよう工夫

- おせち、七草、インド料理など、ただ調理するだけでなく、季節の行事なども取り入れ、ミニエピソードを盛り込むことで興味付けを行なった。
- 参加者が大人数時の待ち時間増大の課題を受け、班制度やメニューの簡素化を導入

- **思春期（中高生）の心の居場所を守るための距離感**
  - 中学生には「教える側」や「自習の場」としての役割を用意し、精神的な支えとなる距離感を工夫

7. 分析・考察（モデル事業としての意義）

- **「目的・手段」から解放された場の提供**

  成果や評価に縛られず、純粋に「ほっと一息つける場」を実現することを意識した。
- **「もの・出来事そのもの」を楽しむ経験の重要性**

  非生産的な時間が情緒の安定や好奇心の回復を支援した。

  （例）A 君が牛乳パックを積み壊すプロセスに没入し、保護者から困った行動がなくなったとの報告があった。
- **図書館で実施することの有効性**

  図書館を活用した事で社会から肯定される安心感を提供し、指導する・される関係ではなく、共に面白がり、共に試行錯誤する大人の存在が子どもたちの安心感や自己肯定感を引き出した。本はもちろん、ボードゲーム、DVDなどの協力を受け、そこに集う地域の人たちの理解も得られて、安心して過ごせる居場所で人の輪が広がりつつある。

8. 今後の展望と課題

- **「そのもの自体を楽しむ」場の継続的な提供**
  - 評価や成果を求められない「無目的な楽しみ」を許容する運営指針を今後も堅持
  - 「発散」「やりたいことへの没入」を意識した場の構成を意識する
- **運営体制の安定化と安全管理の高度化**
  - スタッフの「俯瞰的な見守り」スキル向上、緊急時マニュアルの整備
  - 参加人数変動への対応、班制度や事前予約制の導入検討
- **社会資源とのさらなる連携と社会への発信**
  - 大学生スタッフや地域ボランティアの研修・交流強化
  - 地域企業や社会資源が「子どもの居場所」に参画する仕組みの拡大

- **持続可能な財源の確保**
  - 行政委託だけでなく、民間助成金や寄付など多様な財源の確保の必要性
  - 「箕面モデル」としての価値を地域施策に反映

9. スタッフの声

- **現場責任者 A**
  実践を通じ、「成績を上げる」「スキルを得る」といった特定の目的を達成するための手段として活動を提供する以上に、子どもたちが「もの・出来事そのものを楽しむ経験」を積むことの重要性を再認識した。スタッフの意識は「何かを教える、やらせる」から「子どものありのままを認め、共に面白がる」へとシフトした。「今日宿題を終わらせる」「立派な料理を作る」といった成果以上に、子どもが「ただ、ほっと一息つけること」の価値を最優先にするようになった。

- **メインスタッフ B**
  小学生および中学生の見守りを支援する中で、【居場所】を必要としている子が潜在的に多いと実感した。特に、最初は暗い感じだった A さんが徐々に笑顔を見せるようになったり、落ち着きがなかった B さんが体力を使って遊ぶことで落ち着く場面が増えたりした。放課後の居場所はコスパや成果を求められがちだが、子どもに寄り添って、まずはあえて何もせずに受容することが大事だと感じた。子どもたちは詰め込まれて疲弊しているからこそ、リラックスでき、否定されずに受容されるサードプレイス（家・学校以外の第三の居場所）が必要だと感じた。

- **メインスタッフ C**
  当初は「子どもたちが安心して過ごせる場所」という認識だったが、現場で最も大切にされていたのは「子どもたちの発散」だった。牛乳パックやダンボールなど身近な素材を用いた遊びが中心で、禁止されがちな行為や感情を否定されずに表現できる場だった。
  学校に行きづらかった子が登校を再開したり、感情を抑えていた子が少しずつ言葉にして話し始めたりする変化が見られた。支援する側も人との関わり方や物事の捉え方に変化が生まれた。

- **メインスタッフ D**
  最大の課題は「こもれびひろばとは子どもにとって何なんだろうか」という疑問が沸いたことである。多様な子どもがいるが、開催曜日や部屋の大きさなど制約が多いと思った。長期的に来ていた子どもは一握りで、ほとんどの子どもは続けて来なくなったので、もし、制約の一つを取り除けるなら、開催をほぼ毎日にして「来たい時に来れる場所」こそが居場所だと感じた。

10. 軽食活動一覧（抜粋）

日付	メニュー	参加人数	備考・特徴
2025/7/25	パスタ	12 名	初回、スタッフ主導で実施
2025/8/1	おにぎらず	15 名	役割分担を試行
2025/8/8	ポリ袋クッキング	18 名	防災アドベンチャーと同日開催
2025/9/19	クレープ	26 名	最高参加人数、待ち時間課題発生
2025/10/3	豚汁	10 名	秋メニュー
2025/10/17	お好み焼き	14 名	生涯学習センターで班別調理
2025/11/7	七草がゆ	8 名	季節行事を意識
2025/12/5	巻き寿司	13 名	班ごとに役割分担
2025/12/26	雑煮・いなりずし	16 名	国際交流イベントと同日
2026/1/10	サンドイッチ	11 名	子ども主体で準備・片付け
2026/2/13	ゆずジャム みたらし団子	9 名	ゆずの下ごしらえ体験
2026/2/20	のんびり ポップコーン映画会	9 名	コーンを熱してポップコーン 食べながら映画会
2026/3/6	パンケーキ	18 名	小麦粉からパンケーキを作る
2026/3/13	海苔チーズトースト	18 名	余った海苔で簡単トースト
2026/3/20	子ども屋台村 ホットドック・おにぎり	14 名	子どもたちの手作りで保護者を招待

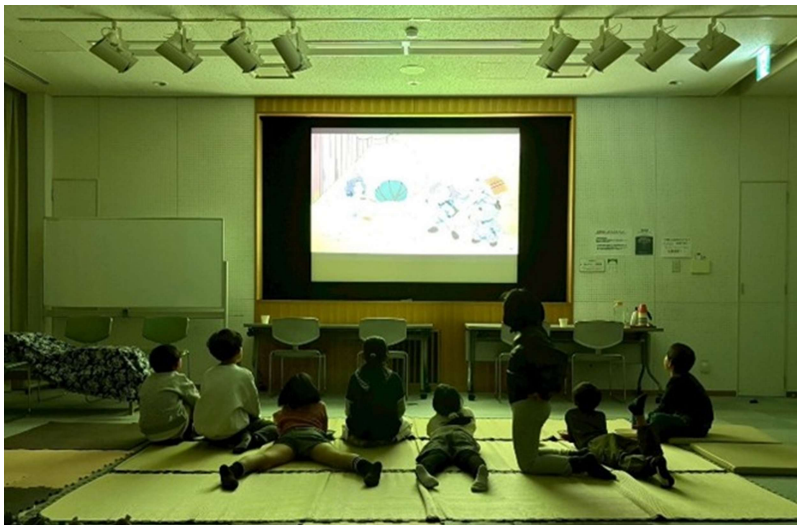
8 月の防災イベントでは、

ポリ袋クッキングで蒸しパン作り、

お湯で温めるレトルトご飯の体験。

賞味期限が近い避難所のパンをいただいた。

11.　資料：活動の写真（国際交流・ポップコーンで映画会）



保護者の声

保護者 A：
家ではできないボードゲームをいっぱい楽しめた。普段は遊ぶ約束をする友人もいないので、こもれびに来れば馴染みの友達がいることが嬉しい。軽食活動を通して家の食事においても食に対する興味を持てるようになった。

保護者 B：
軽食活動を通して自分の子が色々とできるようになっていることがわかった。色々なボードゲームを楽しめることが良かった。

保護者 C：
家でも軽食活動の話を楽しんでしている。

保護者 D：
保育園では転園したりして継続して付き合える友人ができておらず、学童で遊ぶだけだった。こもれびでは遊べる友達がいて嬉しい。活動を通じて自立心が育った。

保護者 E：
習い事やルーチンのようにこもれびの参加を楽しみにしている。元々家でも料理をしているが、軽食で体験したメニューを家でも作っている。

保護者 F：
軽食を楽しみにしている。家で、軽食活動で作った海苔チーズトーストを家族全員に作ってくれた。ボードゲームの「ウボンゴ」が好きすぎて家でも買った。こもれびで作り方を教わったゴム鉄砲も、自分で家で作った。

その他の活動中の写真